

# 名作で迎える日本伝統芸能

## 伝統芸能のヒロインたち—愛と死のさまざま 静と義経—ひたむきな思い

### 能（船弁慶）、文楽（義経千本桜）

講師：北見 真智子先生

日時：5月13日（水）10:00—11:50

#### ■源 義経（1159～89）

平安末期から鎌倉初期の武将。義朝の九男。母は常盤御前幼年牛若丸。平治の乱で平氏に捕えられ鞍馬寺に入れられたが、密かに奥州の藤原秀衡の下に赴いて庇護を受けた。

#### ■静御前（生没年不詳）

平安末期から鎌倉初期の女性。父は不明。母は磯禪師。もと京の白拍子、のちに義経の愛妾。義経が頼朝と不和になったことから、吉野落ちに随行、捕えられて鎌倉に送られた。頼朝の妻正子は歌舞をよくするという静を鶴岡八幡宮で舞わせた。「しづやしづしづのをだまきくりかえし昔を今になすよしもがな」と義経への慕情を歌った話は有名。

●吾妻鏡：1180（治承4）年の源頼政の挙兵から1266年の宗尊親王の京都送還までの鎌倉幕府の歴史を編年体で綴った歴史書。3代将軍までとそれ以後とで成立年代が違う。編纂者不明

●義経記：室町前期の軍記物語。作者、成立年代ともに未詳。義経が平家追討の大將として活躍するもっとも華やかな時期の事跡はほとんど書かれず、幼年期と、平家滅亡後、頼朝に追われて自殺するまでの逸話を内容とする。判官物語。義経物語。伝説としての義経。

#### ■義経記に描かれる静御前

義経が愛する白拍子の名手として登場。最初に現れるのは、土佐坊正尊が義経の六条堀河の邸を攻める堀河夜討の場面。敵の来襲を察知して義経に知らせている。「賢々しき者」と評されるとおり機転の利いた行動をとる。

#### ★能（船弁慶）映像で観賞

義経一行が摂津・大物の浦から九州へ落ちようとした時、平家の怨霊の仕業で暴風雨に見舞われたという記述（義経記他）を、能では敦盛の怨霊によるものとして、脚色されている。

あらすじ：義経は、弁慶たちとともに都を離れ、大物の浦に到着する。義経を慕う静御前（前シテ）も同行していたが、都に戻るよう弁慶に諭された静は、白拍子姿で舞を披露し、涙ながらに別れる。大物の浦を出発すると、にわかには海が荒れ暴風雨になる。海上には壇ノ浦で滅びた平家一門の亡霊が出現。平智盛の亡霊（後シテ）は義経に襲いかかる。義経も冷静に迎えるが、弁慶に祈り伏せられた智盛の亡霊はやがて姿を消す。

#### ★文楽（義経千本桜）映像で鑑賞

「道行初音旅」あらすじ：義経の行方を追う静御前が、大和・吉野山へ向かう旅路を中心に展開する。頼朝の追討を受けて都落ちした義経は静と別れ、彼女に形見として「初音の鼓」を託す。その後、義経が吉野に潜むという噂を頼りに、徒として佐藤忠信を伴い旅に出る。旅の途上、静が鼓を打つと、その音に応じて忠信現れるという不思議な現象が繰り返される。忠信は本物ではなく、鼓に用いられた狐の子が化けた存在であり、親である狐の皮で作られた鼓への愛着から静に付き添っていることが、後に明らかとなる。

「恋と忠義：恋の物語と同時に親子愛」が重ねられた二重構造になっている。

#### ●四段目 道行初音旅の一節

恋と忠義はいづれが重い、かけて思ひは、はかりなや。忠と信（まこと）の武士（もののふ）に君が情けと預けられ、静かに忍ぶ都をば後に見捨てて旅立て、作らぬ形（なり）も義経の、御行末は難波津の、浪に揺られて漂ひて。今は吉野と人伝ての、噂を道のしほりにて、大和路、さして慕ひ行く・・・

（記事：1斑広報担当）

